フェスタ 国立大学2016

ともに未来を考える
地域でつながる私たちにできること

平成28年度

大学改革シンポジウム報告書

島根大学 教育・学生支援機構 アドミッションセンター

開会あいさつ

島根大学長　服部　泰直

島根大学の服部でございます。

本日は、島根大学の「平成28年度大学改革シンポジウム」を、この雲南市の「教育フェスタ2016」、この場をお借りして開催できることになりました。速水市長を初め雲南市、雲南市の教育委員会の方々に、まず御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

また、この大学改革シンポジウムは、国立大学協会、全国の国立大学全てが加盟している協会でございますけれども、その国立大学協会との共催となっております。本日は、国立大学協会から山本専務理事にお越しいただいております。どうもありがとうございます。よろしくお願いいたします。

さて、島根大学は、松江と出雲にキャンパスを持っておりまして、全部で学生6,000名ほどございます。地域にある、この島根の地にある大学、高等教育機関として、いかに地域に貢献していくか、それを深く今考えて追求しているところでございます。その一つが、地域貢献人材育成入試ということで、島根県と鳥取県に地域を限定しまして入試枠を設けております。これは、昨年の秋に実施いたしまして、今年の４月に１期生が入学してきました。本日は、その地域貢献人材育成入試で入学してきました学生を初め30名ほどの島根大学の学生が、この大学改革シンポジウムに参加してございます。これからここでの討論を踏まえまして、雲南市の高校生の皆さんと、本学の

学生がともに地域課題に向けた検討を行うことになっております。島根大学としましては、学生をいかに地域に出し、この地域課題を理解し、またその解決方法を探るか。それをそれぞれの専門分野、各学生はそれぞれの学部、それぞれの専攻を持ってございます。そこの専攻を生かす、専門知識を生かして地域課題にいかに貢献していくか、これを大きな課題としてございます。本日は、そのような課題解決に向けての非常にいいチャンスかなと思っております。できれば学生が本日のこのシンポジウムに参加したことを機会に大きく成長していくことを祈っておりますし、また学生が参加することにより、雲南市の高校生にも何らかの刺激を与えられたらと考えてございます。

先ほど市長さんからの話で、この教育フェスタ、本年で25回と聞いております。島根県、地域課題、多くございます。その地域課題に率先して取り組まれた雲南市、特に教育というものを中心として考えられてこられたことが、この25回という回数にあらわれているものと考えております。島根県にある高等教育機関としての本学の役割を今後も十分果たすとともに、地域の皆さんとともに島根県の課題を解決していきたく考えてございます。

本日のシンポジウムが盛会に、そしてここに御参加いただいている皆さん方の少しでもよい知見になれば幸いでございます。大学改革シンポジウム、ちょっと雲南市に間借りして開催させていただきますけれども、非常に我々にとっては喜ばしい機会だと考えております。これを機会に、島根大学学生、教員、全てが、またこの地域のほうに出かけてきて、さまざま皆さんと交流しながら一緒に地域課題解決に向けていきたいと考えております。今後とも島根大学の教育・研究に御理解いただきまして、御支援賜れば幸いでございます。本日のシンポジウムが盛会になることを祈りまして、挨拶とかえさせていただきます。

平成28年度
大学改革シンポジウム

ともに未来を考える 地域でつながる私たちにできること

開催日　平成 28 年 10 月 16 日（日）
会　場　雲南市加茂文化ホール　ラメール
主　催　島根大学
共　催　一般社団法人国立大学協会

目　　次

■ 開会あいさつ
島根大学長　服部　泰直

■ 第１部
○高校生と大学生による地域活動体験発表 …… 3
【発表者】
島根県立大東高等学校　２年　福間　千紘、楠　胡桃、川本　晃子
島根県立飯南高等学校　３年　村重　彩香、２年　須藤　孝太、
２年　武田　遼平、１年　熊代　剛琉
島根大学教育学部　１年　土江あやか
島根大学生物資源科学部　４年　藤井　春菜

■ 第２部
○高校生と大学生のワークショップ …… 21
【ファシリテーター】
高須　佳奈（島根大学地域未来戦略センター　講師）
中野　洋平（島根大学地域未来戦略センター　講師）
【参加者】
島根大学学生
島根県及び鳥取県の高校生
※ワークショップ　アンケート結果 …… 26

○トークセッション …… 28
【ファシリテーター】
今村　久美（認定特定非営利活動法人　カタリバ　代表理事）
【パネリスト】
小山　竜司（神奈川大学　理事長付特別審議役、前まち・ひと・しごと創生本部事務局参事官）
岩本　　悠（島根大学地域教育魅力化センター　地域教育アドバイザー、島根県教育庁　教育魅力化特命官）

■ 第３部
○クローズセッション …… 39

■ 付　録
参加者数、アンケート結果ほか

島根大学の「平成 28 年度大学改革シンポジウム」は、雲南市主催「教育フェスタ 2016」と共同開催しました。

第１部

高校生と大学生による地域活動体験発表

島根県立大東高等学校
福間　千紘（２年）、楠　　胡桃（２年）、川本　晃子（２年）

島根県立飯南高等学校
村重　彩香（３年）、須藤　孝太（２年）、武田　遼平（２年）、
熊代　剛琉（１年）

島根大学　教育学部
土江あやか（１年）

島根大学　生物資源科学部
藤井　春菜（４年）

高校生と大学生による地域活動体験発表

地域課題研究　佐世地区防災

島根県立大東高等学校　2年3組
福間　千紘、　楠　胡桃、　川本　晃子

これから、大東高校地域課題研究、佐世地区の発表を始めます。　私は、大東高校２年、福間千紘です。

同じく、川本晃子です。

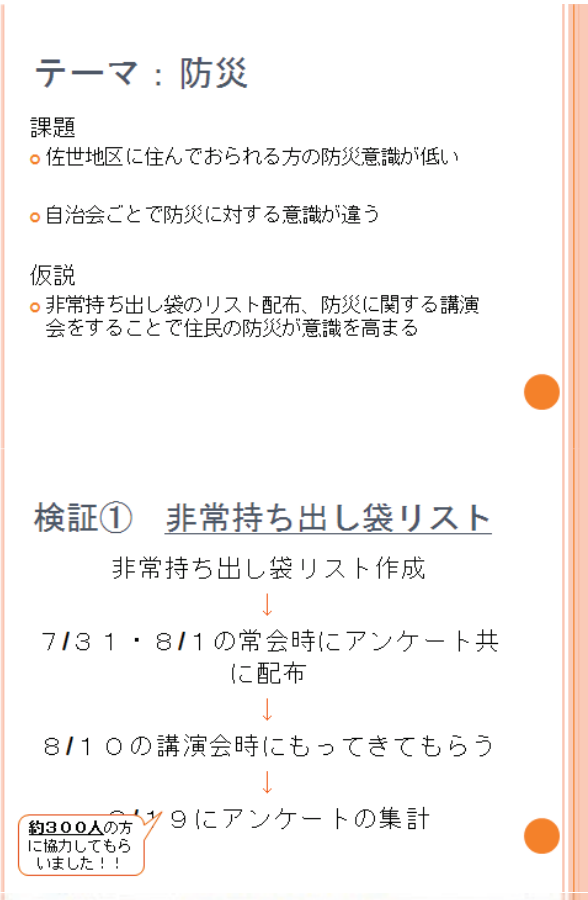
同じく、楠胡桃です。よろしくお願いします。（拍手）

私たちは、防災をテーマにした地域課題研究をしました。このテーマにした理由は、佐世地区に住んでおられる方の防災に対する意識が低いというアンケート結果を見たことと、自治会ごとに防災に対する意識が違うということを交流センターの安部さんから聞いたからです。

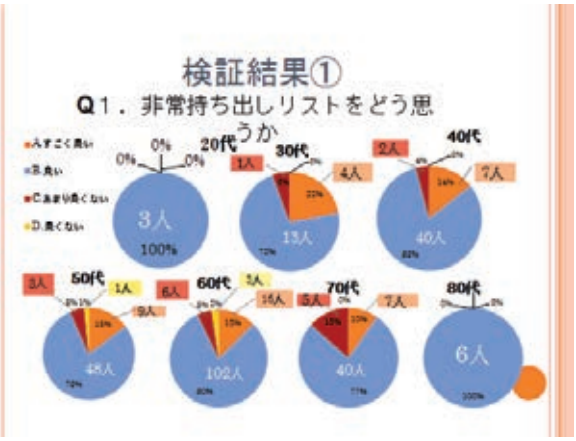
このテーマに対して、私たちは非常持ち出し袋リストの配布と、防災に関する講演会をすることで、住民の意識が高まるという仮説を立てました。この仮説を検証するために、私たちは二つの実践をし、アンケート調査によって検証をしました。

一つ目は、非常持ち出しリストの配布です。私たちが実際に市役所の安部さんからもらったパンフレットをもとにパソコンで作成し、７月31日、８月１日の常会のときに各自治会の班長さんにリストとアンケートを配布してもらい、アンケートは８月10日に行った講演会のときに持ってきてもらいました。集計は、８月19日にしました。

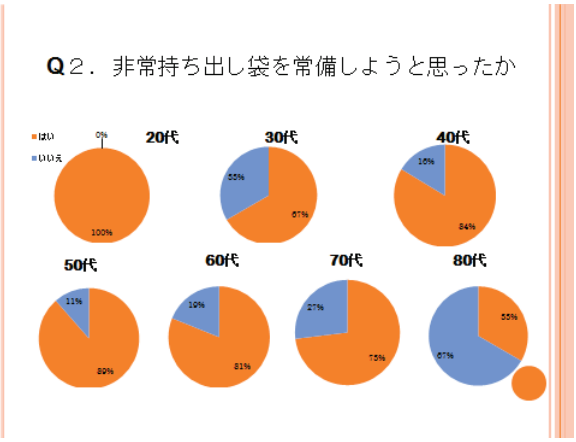
これが、実際に配った非常持ち出し袋のリストです。460世帯にこのリストを配りました。



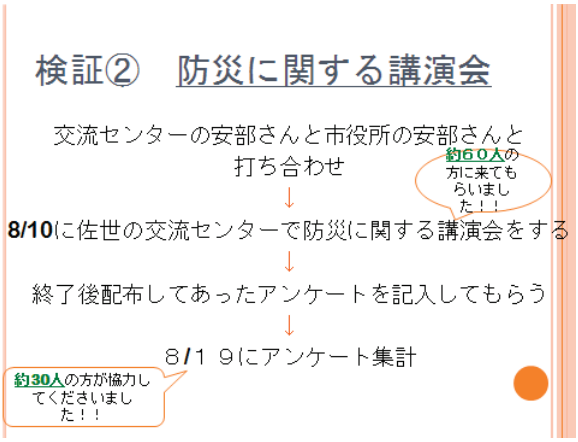
アンケート結果はこちらです。「非常持ち出しリストをどう思うか」という問いに対して、「すごく良い」、「良い」の割合が多かったです。しかし、「あまり良くない」、「良くない」と答えた人もいたため、もう少し工夫をすればよかったと思いました。特に、このような回答は50代、60代に見られたもので、もう少しグッズの使い方や説明を入れればよかったです。



また、「非常持ち出しリストを常備しようと思ったか」という問いに対して、もともと持っている人が「いいえ」と答えているのを含めているため、それを除けばほとんどの割合で「はい」と答えてもらうことができました。



二つ目は、防災に関する講演会です。佐世の交流センターの安部さんと、市役所の安部さんと打ち合わせをし、８月10日に佐世の交流センターで、講師の市役所の安部さんに来ていただき、行いました。



講演会では、私たちみずから司会進行を務め、風水害、避難場所や避難経路などの説明を行いました。講演会終了後、来てくださった皆様にアンケートに御協力してもらい、８月19日に集計をしました。これは講演会の様子です。約60人の方が来てくださいました。こんなに来てくださるとは思ってもいなかったので、驚きました。

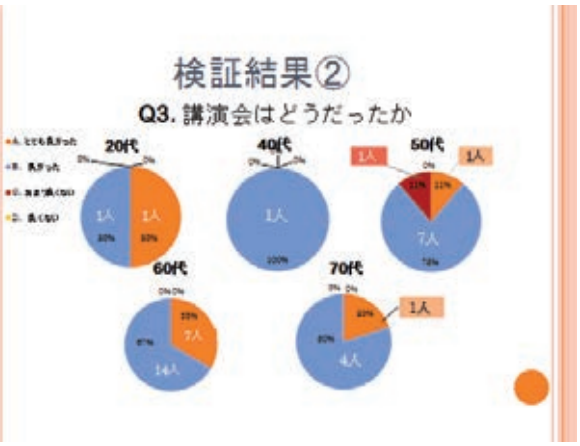
アンケート結果がこちらです。「講演会はどうだったか」という問いに対して、「とても良かった」、「良かった」と答えた人がほとんどの割合を占めており、講演会は成功したと思いました。

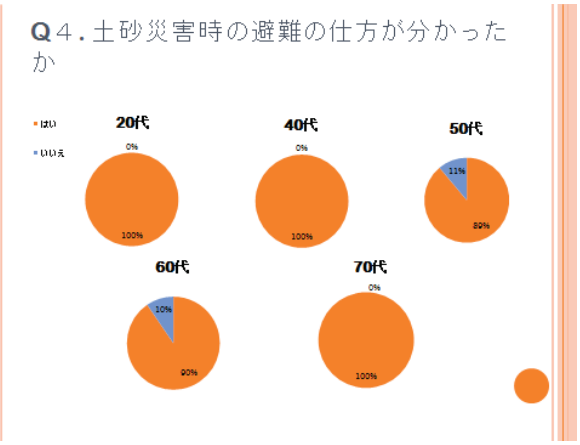
また、「土砂災害時の避難の仕方が分かったか」という問いに対しては、「はい」と答えた人がほとんどの割合を占めており、講演会で得るものがあったということがわかりました。

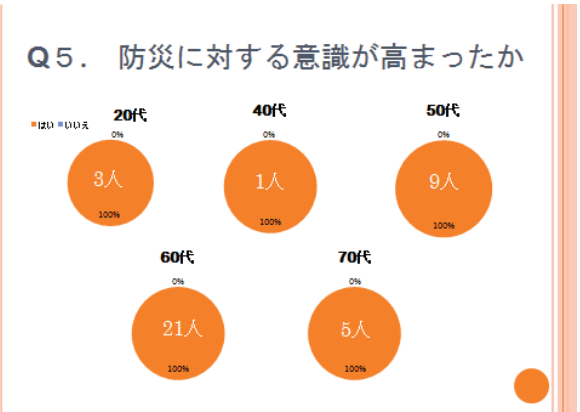
そして、「防災に対する意識が高まったか」という問いに対して、アンケートに答えてくださった皆様が「はい」と答えており、今回の講演会の目的は達成できたと言えます。

考察です。この研究から、地域の方にふだん忘れがちな防災に目を向けることを促すことができました。なので、講演会を行うと防災に対する意識が高まると考えられます。

そして、この研究から見えてきた新たな課題は、若い世代が講演会にあまり来ないため、若い世代が来るような工夫をする必要があると思いました。例えば、ＳＮＳを利用して、各自治会の防災に関する取り組みを発信するなどしたらよいのではないかと思いました。







考察

- この結果から講演会を行うことにより、地域の方に普段忘れがちな防災に目を向けることを促すことができたため防災に対する意識が高まると考えられる。
- この研究から見えてきた新たな課題は若い世代があまり来ないため若い世代の意識を高めるような工夫をする必要がある。
- SNSを利用して各自治会の防災に関する取り組みを発信し意識を高める。

この地域課題研究を振り返って、一つのことを達成するのに複数のことを同時にやらないといけないことの難しさや、限られた時間の中で企画し、運営することの大変さを知ることができました。企画しているときには、アンケートにあまり協力してくれなかったり、講演会で人が集まらなかったらどうしようという不安がありました。しかし、実際にやってみると多くの方に協力してもらえたり、たくさんの方が講演会に来てくださったりしたので、地域の方々の温かさを改めて感じることができました。本当にやってよかったです。

今回の地域課題研究を行う中で、交流センターの安部さんや市役所の安部さんをはじめとして、佐世地区のたくさんの人のおかげで検証することができました。それにより、私たちは地域の人に支えられていることを感じることができました。今後はこの体験をもとに卒業して社会に出たときや、日々の活動で活かしていきたいと思いました。

以上で、大東高校地域課題研究、佐世地区の発表を終わります。御清聴ありがとうございました。（拍手）

研究を振り返って

- 企画して実践することは時間がなく準備が大変だった。
- 地域の人に支えられていることを改めて感じた。
- 今回の体験を卒業して社会に出た時や日々の生活で生かしていきたい。

森の学校サマーツアー2016
～町を変える高校生～

島根県立飯南高等学校
3年　村重　彩香、 2年　須藤　孝太
2年　武田　遼平、 1年　熊代　剛琉

皆さん、こんにちは。飯南高校です。僕たちは、一から企画をして「森の学校サマーツアー2016」というイベントを開催しました。

ちなみになんですが、僕は千葉県から、千葉県の中学校から飯南高校に入学しました。隣の彼は神奈川県、隣の彼は兵庫県から、全国それぞれ各地から飯南高校に入って学校生活を送っております。最後に、隣の彼女なんですが、実は何と出身がここ雲南市になります。笑ってくれてありがとうございます。すごい緊張してました。

これから詳しく「森の学校サマーツアー2016」について説明をしていきます。御清聴、よろしくお願いします。（拍手）

こんにちは。僕は、昨年の春に飯南高校に入学しました。僕が飯南高校に入学して一番驚いたことは、ここ見てください。こっち２、３年生なんですけど、僕らの年、とても人数が少なかったんです。実際、数字で見てみると、何と48人というとても少ない人数で学校生活がスタートしました。

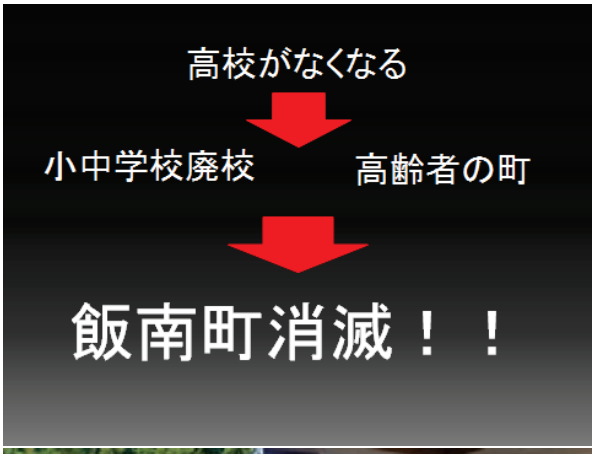
そして、そこから数カ月間、飯南町で過ごして、一つわかったことがあったんです。とても田舎だということです。（笑声）ありがとうございます。田舎で何もない、つまらない町だなと僕は思いました。僕は一つ不安に思ったことがあったんです。人数が少なくて田舎だと、ちょっと飯南高校やばいんじゃないかなと思ったんです。もし、高校がなくなったら、小・中学校が廃校になって高齢者だけの町となってしまいます。そうなると、飯南町自体が消滅してしまうんじゃないかなと思いました。

入学時の全校

学年	1年		2年		3年		合計
組	1組	2組	1組	2組	1組	2組	
男	16	15	26	19	26	8	110
女	8	9	16	18	13	23	87
合計	24	24	42	37	39	31	197
	48		79		70		

そんな中、町が５年ほど前から行っているサマーツアーというものがあったんですけど、それに去年参加しました。これが去年の様子です。去年のツアーを通して、僕は飯南町のよさを発見しました。例えば、こういう自然がいっぱいあったりとか、あとおもしろいおじさんがいっぱいいたりとか。さまざまないいところを発見しました。

そして、何とこのツアーで、ここにいる熊代君を初めとした中学３年生３人が入学してくれました。そして、僕はこのツアーを通して３人の中学生、３年生を入学させたことで、自分たちにも現状を変える力があることに気づきました。そして、現状を変えることができる力があることに気づいた僕たちは、町の職員が今まで行ってたサマーツアーの企画を、高校生の僕らに一から企画させてくれないかとお願いしました。そこから僕たちの「森の学校サマーツアー2016」は始まりました。



しかし、現実ではそう簡単にはいきませんでした。メンバーの気持ちが一つにまとまらずに、とても苦労した時期もありました。

さらに、部活動に所属しているメンバーも多く、会議に参加できないメンバーも出てきました。ちなみになんですけど、我が飯南高校にはサッカー部がありません。（笑声）ありがとうございます。しかも、テスト週間中は勉強を優先しなければいけないので、企画会議が開けないということが起きてきました。会議が開けなくてその企画が進まずに、いっときは本当にやばいと思った時期もありました。さらに、新しい企画を立ち上げてお願いをしに行っても断られてしまったりして、このままではサマーツアーが開催できないんじゃないかとかいう不安も出てきました。

しかし、みんなでそれを乗り越えてサマーツアーは無事に開催することができました。そんな苦労を乗り越えて、みんなでつくり上げたサマーツアーがこれです。

実際どういうことやったのかを一部説明します。

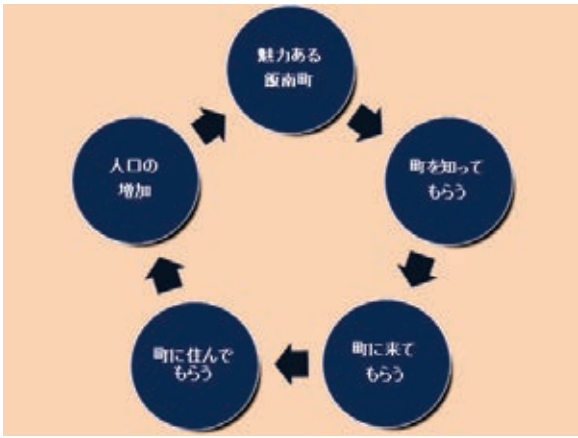
野菜収穫体験をしました。都会の子たちはなかなかできない体験だったので、とても楽しんでくれて、こんなに多くの野菜がとれました。この野菜は、夜にバーベキューをしました。バーベキューのことは後々説明します。飯南町には志津見ダムがあって、そのダムの見学をしに行きました。ダム湖で巡視体験をしました。これはとても、みんな喜んでくれて楽しかったです。夜にはバーベキューをしました。町長が来てくださり、地域の人たちと交流をしながらバーベキューをしました。この後には、地域の方々の家に行って民泊もさせてもらい、とてもいい経験になりました。

ただ、私が一番個人的に楽しかったのは、ピザづくり体験です。後ろのほうに、今動画で流れてるんですけど、石釜でピザを焼いて、なかなかできない体験だったので、とても楽しかったです。私はこの体験で一番元気がよかったです。（笑声）

こんなに楽しかったサマーツアーなんですが、このサマーツアーを通して僕たちが飯南町にどういう影響を与えていきたいかっていうのを説明していきたいと思います。

まずは、自然たっぷり、魅力たっぷり飯南町、それを、知ってもらう。そして、サマーツアーに実際に来てもらう。中学校３年生を高校に呼ぶイベントなので、３年だけでもいいから飯南高校に入学して住んでもらう。すると、町の人口がふえる。さらに魅力のある飯南町ができる。その魅力の増した飯南町っていうのを来年のサマーツアーでさらに知ってもらって、来てもらって、どんどん飯南町の魅力、人口をふやしていく。そういう、サマーツアーを中心としたサイクルをつくりたいなと思っています。

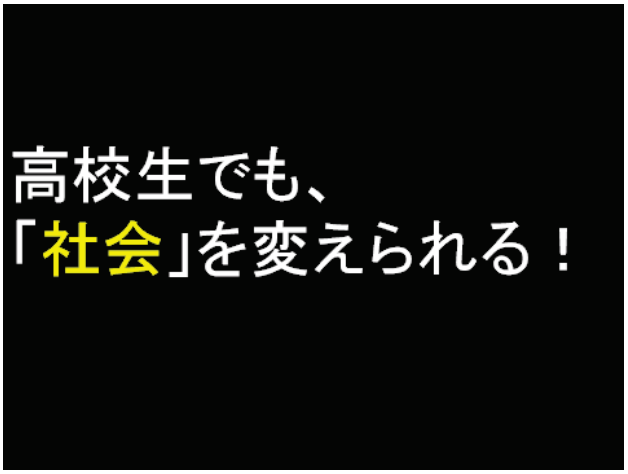
最後になりますが、僕たちが今日のスライドを通して、一番伝えたかったことを伝えます。それは、高校生でも社会を変えることができるということです。僕は、高校に入学した際、社会とのつながりなんて意識したこ



とがありませんでした。もし、かかわるとなったとしても就職してからだとか、もしくは成人してからだとか、ずっと先の未来のことのように考えていました。

ただ、去年、そして今年のサマーツアーを通して、社会と触れ合うことで自分と社会との距離を明確にすることで、自分でも、高校生でも、僕でも社会を変えることができるという意識を持つことができるようになりました。この意識をここにいる皆さんで共有することができれば、必ずやよい社会がつくれると確信しています。ここにいる皆さんでよりよい社会、よりよい島根県をつくっていきましょう。

御清聴ありがとうございました。（拍手）



COC人材育成コースから地域へ

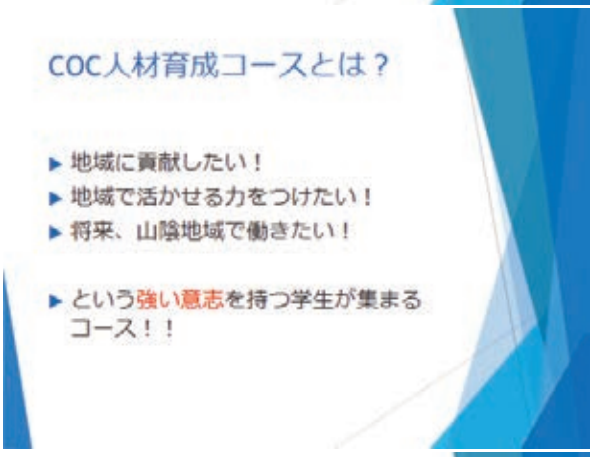
島根大学　教育学部　　1年　土江　あやか

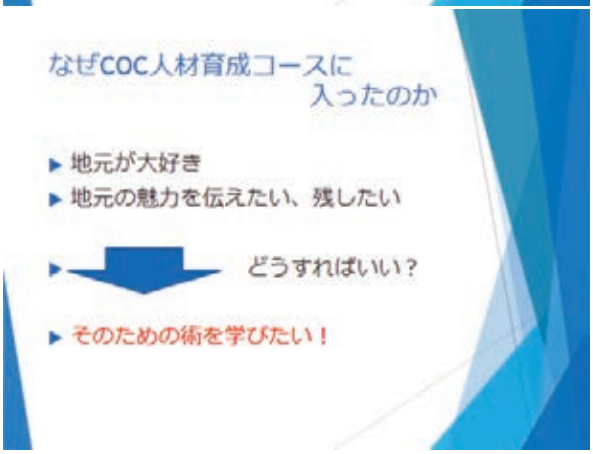
島根大学教育学部１年の土江と申します。よろしくお願いします。

私のほうからは、ＣＯＣ人材育成コースの活動についてプレゼンテーションをさせていただきます。

まず初めに、ＣＯＣ人材育成コースとはどういうコースなのかということについて説明します。ＣＯＣ人材育成コースというのは、地域に貢献したい、地域で生かせる力をつけたい、将来山陰地域で働きたいという強い意志を持つ学生が集まるコースです。私自身も鳥取県の米子市の出身で、将来は鳥取県の米子市で教員として働きたいと思っている一人です。ＣＯＣ人材育成コースには、現在、総勢53名の学生が所属しており、私たちが１期生ということになっています。各学部にコース生がいまして、医学、教育、法文、総合理工、生物資源、各分野からそれぞれの学生が専門とする分野を地域に持ち寄って、どのようにその技術を生かしていくかということを考えてそれを実行していく、そういうことを目的としたコースです。

私がどうしてＣＯＣ人材育成コースに入ったのかということですけれども、私は地元である米子市がとっても大好きです。大好きな地元の魅力を伝えて、後世に残していきたいと思っているんですけれども、地元の同級生、友達は、ほとんどの人が大学進学と一緒に憧れている都会のほうに出ていってしまいました。それで、鳥取県は人口が全国で一番少ないと言われているんですが、その現状はずっと打破することはできない、ずっと変えられない。じゃあ、どうやったら地元の魅力を誰かに伝えて、残していくことができるのか、どうすればいいのか。そのためのすべを学びたいというふうに思って、私はＣＯＣ人材育

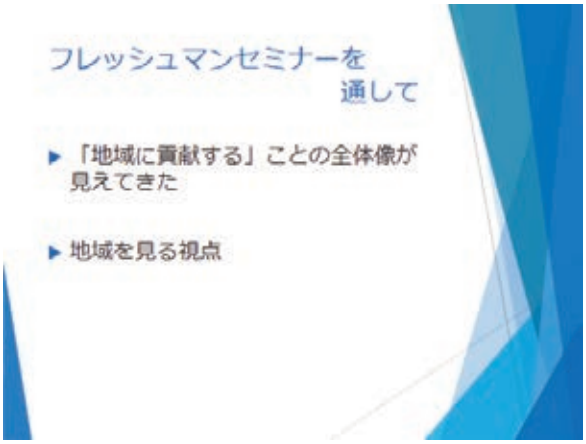




成コースに入りました。

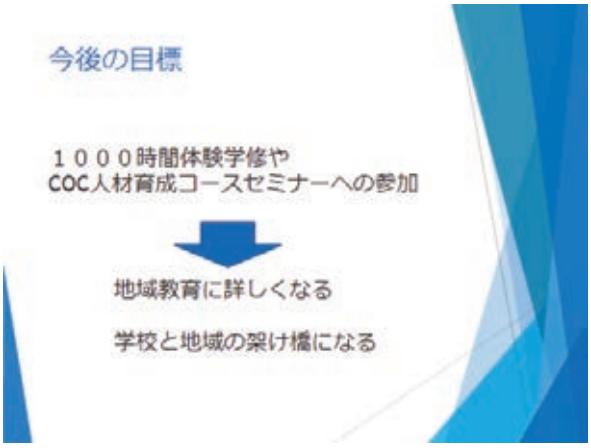
　では、ＣＯＣ人材育成コースではどのような活動をしているのかということですけれども、ふだんからさまざまなセミナーを受けているんですが、その中でも、１泊２日で行われた大きなセミナーがあったので、そちらを紹介します。フレッシュマンセミナーというセミナーです。出ている写真は、掛合町の波多地区というところを、波多の職員の方と一緒にフィールドワークしているところです。ここでは、みんなで波多の地区を歩いて、波多の町並みを見て回り、どのような建物があるのかということをみんなで一緒に学びました。同じフレッシュマンセミナーの中で、入間のほうにも行ったんですけれども、入間の交流センターで田植え体験をしているところです。こちらも入間の交流センターで、夜、バイオマス事業についての授業、講義を受けているところです。フレッシュマンセミナーでは、地域資源を見つけようというテーマのもとで、みんなで地域の取り組みについて学びました。事前指導として、地域自主組織などについても勉強してからこのセミナーには参加しました。

　フレッシュマンセミナーが終わってもう半年ほどたつんですけれども、今、このセミナーを思い返してみて私自身が変わったことというのを紹介します。私は、地域に貢献するということの全体像が見えてきたということがありました。地域に貢献するといっても、どのように貢献したらいいのかというのは全くわからない。ただ、漠然と大好きな地元に貢献したい、そんなことがしてみたいという気持ちでいたんですけれども。フレッシュマンセミナーに参加してみたら、雲南市の方々というのはものすごい行動力を持っていらっしゃって、何か思いついたらすぐに発言して、すぐに動くという姿を見ていました。こういう行動力を持つことが、まさに地域に貢献することのスタートではないかと私は思いまし



た。

　また、地域を見る視点というふうに書いたんですが、先ほど写真で出しましたフィールドワークをしたという写真があったんですけれども、波多のまちを見て歩いたという体験が、その後、米子市に帰った後にも、米子の町並みを自分の目で見てみたら、今までは見えてこなかったような、こんな歴史的な建造物があったんだということも見え始めて、これが地域を見る視点を養うということなのかというふうに思いました。



　私の今後の目標ですが、教育学部のほうが独自に行っている1000時間体験学修への参加や、ＣＯＣ人材育成コースがこれからずっと開催していくセミナーへの積極的な参加によって、地域教育に詳しいそういう教員になりたい。また、学校の地域のかけ橋になれるような人になりたいというふうに思っています。これから３年半かけてＣＯＣ人材育成コース生として、また教育学部生として、こういう教師になっていきたい、また、地域に貢献していきたいというふうに思っています。

　私のほうからは以上です。御清聴ありが・とうございました。（拍手）

大学生活を振り返って
―地域での学びを中心に―

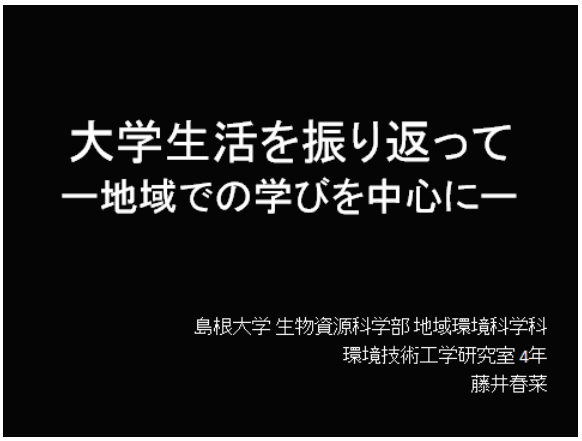
島根大学　生物資源科学部　　4年　藤井　春菜

大学生活を振り返ってということで、発表させていただきます。島根大学４年の藤井春菜です。よろしくお願いします。

まず、簡単に自己紹介をしたいと思います。私は、出身はここから車で約２時間離れたところの広島県尾道市因島というところです。瀬戸内海に浮かぶ島が出身で、はっさくゼリーや除虫菊、ポルノグラフィティの出身ということで有名なところです。私は大学で地域づくりにかかわりたいなと思い、地域に出ていろんな活動に参加させていただきました。今日は、その地域での学びを踏まえて、大学でどんなことをやってきたのかっていうことを振り返りながらお話しさせていただきたいと思います。

大学に入る前の話になるんですけれど、高校３年生のときセンター試験の結果がちょっと悪くて、１月ぐらいまで進路に迷っていたんですが、そのときに出会った三つのものが今の私をつくっていると考えています。その一つが、山崎亮さんという方が書かれた「コミュニティデザイン」という本です。この本の中に隠岐島の海士町の総合振興計画を住民みんなで考えて取り組んだという話があり、そこから島根県というフィールドにすごく魅力を感じるようになりました。

また、二つ目は「しげい帖」という冊子なんですが、これは自分が、何だろう、自分の思い入れのある地域を写真や言葉や動画などであらわして、周りの人に伝えていこうという取り組みの一環で、これが私の地元である因島の重井町というところが発端となって、全国に広がっています。というところから、私もこんなふうに地域づくりにかかわりたい、こんな身近にやっている人がいるんだから、私もできるんじゃないかなというところで、



地域づくりにかかわりたいという思いが強くなりました。

そして、三つ目が、高校の遠足のときに行ったウサギの島こと大久野島というところです。ここは、戦時中、毒ガスを生産していたところで、戦争が終わった後にその毒ガスを島の周りにまいたっていうところで、現在も人が住めない状況なんです。こんな身近に環境問題というのを感じて、じゃあ私に何ができるのか、どんなことを自分はしていかないといけないのかというのを考えると、環境についてもっと学びたいという思いが強くなりました。そしてこの島根県というフィールドで地域づくりにかかわりながら環境について学べるっていう、この欲張りな３つできるっていうところで、この島根大学生物資源科学部への入学を決意して、何とか合格することができました。

大学で、どんなことを学んできたのか。私は、最初、地域に貢献したいという漠然とした思いの中で活動とか勉強をしてきたんですが、例えば授業の中で中海や宍道湖の生態系について学ぶ授業がありました。そこでは、生態系とともに人々の生活や暮らしというものも密着しているよ、という話もあったんです。実際に宍道湖・中海に行ってシジミをとったり生物の調査をしたりして、実際どうなんだろうということを知ったり、また、授業外のところでも中海・宍道湖の付近に住んでいる方々にお話を伺ったりすることで、あ、本当に、人々の暮らしと密着しているんだなということがすごくわかりました。ほかにもいろんな授業があるんですけれど、このような授業を通して、また、地域での活動を通して、水や土、生物、食料、エネルギーといった生活していくに欠かせない基盤、地域資源というものの重要性というのを痛感するようになりました。

また、地域資源の一つである木質バイオマス、これはいわゆる木をイメージしてもらえれば

いいんですけれど、もっとその木質バイオマスを活用していこうよということで勉強している研究会にも所属しています。木質バイオマスは再生可能エネルギーの一つでもあり、燃料としても使えるのですが、これをボイラーとして導入することを考えたときに、どんなデータが要るかなっていうのを調査したり、また、講演会を開催したりというような活動もしてきました。ほかにもちょっと話したいことはたくさんあるんですが、ちょっとここでは割愛しておきます。

そして現在、今、４回生ということで卒業研究に取り組んでいます。卒業研究では、地域資源の一つである水資源、この水処理にかかわる紫外線を利用した技術があるんですが、この紫外線ランプによる微生物の不活化効果、どのぐらい死ぬかなというのを検討する研究を現在行っています。また、私はもう２年大学院に進学して勉強する予定で、そこでは、バイオマス資源の活用について深めていきたいなと考えております。そして、大学院修了後は、地域資源を活用した地域づくりに取り組んでいきたいと考えています。

最後に、高校生の皆さんに少しだけメッセージを送って終わりにしたいと思います。大学の４年間というのは、本当にあっという間で、私も気づいたら４回生の10月というところなんですが、そこで、大事にしてもらいたいもの三つ紹介して終わりたいと思います。

一つは仲間です。島根大学は総合大学で、文系、理系の学生もいますし、また県外の学生が７割、８割を占めるということで、高校までとは違ったまた広いコミュニティーができると思います。そこで、ぜひいろんな仲間を見つけてください。

そして、そんな仲間と一緒にいろんなことに、大学生だからこそ、今だからこそできることに挑戦してほしいと思います。まず一歩踏み出すこと。私これがやりたいんだって、まず口に出すことから始めていくと、きっといろんな人が助けてくれると思います。そして、そこから得たこと、失敗することも成功

することもあると思いますが、そこから得たことをぜひ次に活かしていってほしいと思います。

また、大学は学びの場でもあります。特に島根大学は、先生と学生の間がすごく近くて、いろんなことを聞いたり学んだりすることができます。さらに、地域に出て活動している学生や、授業でもフィールドワークできる授業も多くあり、そこで実際に活かしながら、体験しながら学んでいくことができます。ぜひ、このような環境を活かして充実して楽しい大学生活送ってもらいたいなと思います。

皆さんの今後の活躍に期待して、発表を終わらせていただきたいと思います。御清聴ありがとうございました。

高校生と大学生の体験発表者へのインタビュー

○司会のほうから聞いてみたいと思います。
　大東高校の生徒さん、佐世地区の課題があるということで、「非常持ち出し袋のリスト作る」「講演会をする」いうアイデアのもとに、仮説を立てて検証するという形で取り組みを進められました。こういった手法についてですが、自分たちで仮説とか、検証とか、そういうことを考えたのでしょうか。

○福間
　基本的に、仮説や検証は、自分たちで考えて企画してやりました。

○司会
　やっていく中でいろいろ難しい点もあったというふうに発表の中でも聞いたんですが、もう一度聞いていいでしょうか。どのあたりが一番難しかったですか。

○福間
　やっぱり時間が、企画したりするのも時間がとっても短くて、交流センターの安部さんと打ち合わせしたりする時間も少なく、市役所の安部さんとの講演会の内容とかも決めたりする時間とかもあまりとれなくて、電話とかを使って何回も連絡してやったりすることが大変だったり。非常持ち出し袋のリストは一からパソコンで作って、なかなか上手にいかなかったりして、何かとても大変でした。

○司会
　ありがとうございました。
　一から自分たちで企画をして、仮説を立て、検証していくには苦労もあったということで、高校との勉強や部活動の合間を縫っての活動だったのですね。ありがとうございました。

　では、飯南高校の生徒さんに質問してみたいと思います。
　中学生の時に島根県外から飯南高校のこのツアーに参加して、今度は、自分たちがこのツアーを企画し、次の世代に体験してもらったという活動についての発表でしたね。この企画を通して、自分たちが一番よかったなと思ったこと、やりがいがあったなと思うことは何でしょうか。

○須藤
　今年で、僕、２年生で、去年と今年のサマーツアーに参加したんですけれども、去年のサマーツアーは、町の職員の方が企画をして県外の中学生を楽しませる企画だったんですが、今年は僕たち高校生が行く場所も決めて、行く場所のアポもとってお願いしに行って、企画も全部自分たちで考えて、自分たちで全部やるっていうことが一番やりがいを感じました。

○司会　ありがとうございました。
　大人がするのではなく、高校生が自主的に企画立案、苦労もしたけど達成感もひとしお、ということですね。ありがとうございました。

　それでは、土江さんはＣＯＣ人材育成コースの半年間がたって、今の思いを語ってくれたと思いますが、もう一つここで伝えておきたいこととか、言い残しておきたいことがあればお願いします。

○土江　フレッシュマンセミナーについて説明したんですけれども、大学で受ける講義だけでは絶対にこのフレッシュマンセミナーでやったことっていうのはわからない。実際に地域に出ていってみないと、地域に貢献するっていうことの本質は見えてこないと思うので、こういう機会に参加なさってる高校生の皆さん、とってもいいと思います。地域に出ていくということを、どんどんしていってほしいなと思いますし、私もこれからずっとやっていきたいなと思います。

○司会　ありがとうございます。

では、藤井さん、あと半年で大学４年間を終えようとしていて、次の未来も見据えているところだと思うんですが、今後、藤井さんはどんなふうに大学生活を送っていきたいと思っているのでしょうか。

〇藤井　そうですね、これからもちろん勉強のほうもなんですけれど、今まで続けてきた活動であったり、まだやれてないこともたくさんあるので、実際に地域に出てたくさんまだまだ学んでいきたいと思います。

〇司会　ありがとうございました。
　それでは、高校生、大学生の代表者に、もう一度、皆様、盛大な拍手をお願いいたします。（拍手）
　それでは、これで高校生、大学生による体験発表及びインタビューを終わります。